



前衛書家上田桑鳩による周縁での試み : 作品の所在と「彩書」

向井, 晃子

(Citation)

年報Promis, 1(1):62-78

(Issue Date)

2023-03-31

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100482493>



〈論文〉

前衛書家上田桑鳩による周縁での試み

—作品の所在と「彩書」—

Attempt in the Periphery by Avant-Garde Calligrapher Ueda Sokyu:
Location of His Works and “Colored Calligraphy”

向井 晃子

Akiko MUKAI

I はじめに

本稿は、主に前衛書の分野で活躍した書家上田桑鳩の周縁での活動に注目して、作品の収蔵状況を調査するとともに晩年の試みである「彩書」の作品分析を行い、上田の受容と革新的な制作の一端を明らかにする。前衛書は、昭和初期に萌芽がみられる書の革新的な動きで、戦後に隆盛し、国内外の美術家からも注目を集めた。美術においても書においても比較的マイナーな研究主題であるが、後述するように近年注目を集めつつある分野である。上田は昭和初期に革新的な書を試みた書道芸術社の中心的人物として活動し、その流れは戦後の前衛書へと展開した。上田の門下からは墨人会を設立した森田子龍や井上有一が輩出されているが、同時期に活動して1990年に文化勲章を受章した金子鷗亭や、1982年に文化功労者に顕彰された手島右卿に比べると、前衛書が周縁化されたこともあり上田自身の知名度は高くはない。しかしその創始者的存在である上田は、日本近代における革新的な書を見る上では見逃せない人物である。

そもそも、前衛書が周縁化された経緯は、欧米の美術から影響を受けざるを得なかった日本近代の美術の歩みと関連している。佐藤道信¹や北澤憲昭の研究で明らかのように、日本は明治期に欧米から美術という制度を移入した²。その過程で、江戸以前にあった「書画」という文字と絵が同じ画面に配される美的価値観を問題とした「書画分離」がなされ、日本近代における美術制度では、「書」が周縁化され、「絵画」が中心に置かれたのだ。そして、書と絵画を分離した美術制度は少しずつ形を変えつつも継続し、現在まで続いている。

ただ、上田が現在さほど知られていない要因としては、彼が保守的な書壇と対立して日展を脱退したことが大きい。それは直接的には書をめぐる意見の相違に起因するが、実はその背景には、美術制度で書が置かれた立場も影響していた。というのも、書は美術制度内で周縁化されたため、戦前まで官展に参加できていなかった経緯がある。戦後によりやうく、他部門の協力を得て日展に参加できた書

1 向井晃子『戦後前衛書に見る書のモダニズム—「日本近代美術」を周縁から問い直す』三元社、2022年。

2 北澤憲昭『境界の美術史—「美術」形成史ノート』ブリュッケ、2000年。北澤憲昭『眼の神殿——「美術」受容史ノート』美術出版社、1989年。佐藤道信『明治国家と近代美術』吉川弘文館、1999年。

部門は、革新的な書に対して批判的な他部門の意向を無視することが難しかったのだ。日本近代における書と美術の関係を踏まえると、上田の革新的な書の活動は、書とは何かを問い直すだけでなく、結果として日本近代の美術制度を問い直しており、明治期に分断された書と美術を架橋するかのような試みとして、美術史研究のみならず伝統芸術を含む芸術学諸分野に対しても意義がある。しかし、周縁化された影響もあり、上田の作品や資料の収集保存はさほど進んでいないようで、散逸が危ぶまれる³。

そこで本稿では、まず、上田作品の収蔵状況を調査して、現在の上田の受容を検討する。さらに、上田が晩年に意欲的に取り組んだ「彩書」について、三木市立堀光美術館と滝川市自然美術史館での調査に基づいて作品分析を行い、上田がどのような試みを行なったのかを明らかにする。有彩色で文字を書く「彩書」は、権威から周縁化されていた上田晩年の取り組みであるため注目されづらく、加えて、書はモノトーンを基本とするジャンルであるため取り上げられにくい試みであるが、上田のこの取り組みは、権威から周縁化されながらも革新的な書に取り組んだ証左であり、目を向ける意義がある。本稿では、彩書を「平面の支持体に有彩色を使用した文字が書かれた作品」と定義する。上田には陶や染めの技法で文字を使用している制作もあり、それらに有彩色が用いられている場合があるが、本稿ではそれらを彩書の検討の範疇としていない。

II 先行研究

明治期に制定された美術制度を検証した先行研究に、先述した佐藤と北澤の制度批判的な研究がある。これらは「日本近代美術」が西欧発祥の美術を基準にした制度の構築から始まり、「美術」と「そうでないもの」との線引きが人為的に行われたことを明示した。その「そうでないもの」に分類された書に目を向け、そこから生まれた革新的な動きである前衛書に注目した先行研究が先述の拙著である。上田個人に光を当てた先行研究は、前章で述べた事情から稀少な傾向だが、2014年の拙稿『書のモダニズム』の萌芽：上田桑鳩に見る前衛書⁴がある。彼が前衛書の創始者的立場であることを踏まえて前衛書の先行研究も含めて見ていくと、前衛書と美術の交流に関する研究は、比較的早い時期から見受けられる。例えば、1992年にO美術館で開催された『書と絵画との熱き時代・1945～1969』展では、前衛書と絵画120点余の作品が展示され、図録には天野一夫が、美術界では比較的認知度の低い書団体の書家も対象にして詳細な論考を展開した⁵。また、同年に兵庫県立美術館で『森田子龍と「墨美」』展が開催され、尾崎信一郎が図録論文で森田に的を絞って抽象絵画との交流と断絶を詳述している⁶。2001年にはバート・ウインザー・タマキが*Art in the Encounter of Nations: Japanese and American Artists in the Early Postwar Years*で、「芸術ナショナリズム」(artistic nationalism)という概念で戦後の日本とアメリカの芸術家を取り上げ、アメリカの抽象表現主義が日本という「他者」に

3 本段落の記述は、向井『戦後前衛書に見る書のモダニズム』に拠る。

4 向井晃子『書のモダニズム』の萌芽—上田桑鳩に見る前衛書—『国際文化学』27、2014年、115-138頁。

5 天野一夫『「書と絵画の熱き時代」展・序説』『書と絵画の熱き時代・1945～1969』財団法人品川文化振興事業団O美術館、1992年

6 尾崎信一郎「森田子龍と『墨美』——書と抽象絵画をめぐる——」展覧会図録『森田子龍と「墨美」』兵庫県立美術館、1992年、13-18頁。

支えられていたことを論じる中で森田に注目した⁷。これらは比較的早い時期の貴重な研究で、『書と絵画との熱き時代・1945～1969』が革新的な書を広く扱っていることに対して、後の二者は上田門下から独立した森田に目を向けている。

さらに近年では、前衛書へ目を向ける研究は増えつつあり、例えば、2013年に笠嶋忠幸が著作『日本美術における「書」の造形史』で、森田が編集した『墨美』を取り上げた⁸。2016年には、栗本高行が『墨痕——書芸術におけるモダニズムの胎動』で、第二次大戦後の日本の書の動向から広範囲の新たな制作を論じている⁹。そして、2022年には尾崎の『戦後日本の抽象彫刻——具体・前衛書・アンフォルメル』が著され、日本の戦後美術を論じる中に森田に重心が置かれた形で前衛書が扱われている¹⁰。近年、資料の出版もなされ、2013年に上田が主宰した書道団体の機関誌で森田が編集した『書の美』が復刻発刊され、2019年に『森田子龍全作品集 1952-1998』が刊行された¹¹。

海外の研究動向としては、日本美術を専門とするジェーニャ・ボクダノワが戦後の前衛書に関する複数の論考を発表し、2020年には *Bokujinkai: Japanese Calligraphy and the Postwar Avant-Garde (Japanese Visual Culture, 19)* を著している¹²。香港では2021年に開館した大規模な美術館「M+」の準備シンポジウムが複数開催された中で、2014年の“Postwar Abstraction in Japan, South Korea, and Taiwan”では、戦後におけるインクアートと抽象画の關係に注目して既存の書や水墨画の言説が国家の枠組みを超えた視点で検討され、戦後日本の前衛書と抽象表現がその論題の一つとなった¹³。さらに2017年にアメリカのシカゴ大学で、シンポジウム“Writing and Picturing in Post-1945 Asian Art”が開催され、アジアの戦後美術の範疇で前衛書が検討されている¹⁴。そして、2018年にドイツで出版された論集 *Transcultural Intertwinements in East Asian Art and Culture, 1920s–1950s* では、森田を取り上げた拙稿が掲載された¹⁵。このように森田や井上をはじめとする墨人会に光が当たりがちであった反

7 Bert Winther-Tamaki, *Art in the encounter of nations: Japanese and American artists in the early postwar years*, Honolulu : University of Hawai'i Press, 2001.

8 笠嶋忠幸『日本美術における「書」の造形史』笠間書院、2013年。

9 栗本高行『墨痕——書芸術におけるモダニズムの胎動』森話社、2016年。

10 尾崎信一郎『戦後日本の抽象彫刻——具体・前衛書・アンフォルメル』思文閣出版、2022年。

11 天野一夫監修『復刻版「書の美」』（上、下、別冊解説）国書刊行会、2013年。稻田宗哉責任編集『森田子龍全作品集 1952-1998』蒼龍社、2019年。

12 Eugenia Bogdanova-kummer, *Bokujinkai: Japanese Calligraphy and the Postwar Avant-Garde (Japanese Visual Culture, 19)*, Brill Academic Pub, 2020.

13 M+Matters <https://www.mplus.org.hk/en/events/m-matters/>、最終閲覧 2022 年 11 月 25 日。インクアートとは、書や水墨といった墨を用いた表現を指す。

14 Symposium: “Writing and Picturing in Post-1945 Asian Art”, Joseph Regenstein Library & Logan Center for the Arts at the University of Chicago, April 21-23, 2017, <https://lucian.uchicago.edu/blogs/writing-and-picturing/>、最終閲覧 2022 年 11 月 25 日。本シンポジウムでは、筆者も研究発表を行った。

15 Akiko Mukai, “Coming Closer and Coming Apart: Avant-garde Calligraphy and Abstract Painting in Postwar Japan—Through the Analysis of Morita Shiryū’s Theory and Practice,” Jeong-hee Lee-Kalisch, Annegret Bergmann (ed.) *Transcultural Intertwinements in East Asian Art and Culture, 1920s–1950s*, VDG als Imprint von arts+science Weimar GmbH, Kromsdorf/ Weimar, 2018, pp.127-147.

面、上田はさほど注目されてこなかった。これには、戦後の一時期、美術と積極的に交流した墨人会の活動が美術との関わりから語られやすい一方、上田はその観点からは扱われづらく、かつ、書壇の周縁で活動することになったため、書と美術の双方で周縁化された立場だった影響があるだろう。ただ先述のとおり、上田は森田や井上の師にあたり、昭和初期から戦後にかけての革新的な書を見る上で重要な人物で、今後のさらなる研究が待たれる作家である。ゆえに本稿では、研究の基礎となる上田作品と関連資料の収蔵状況を確認し、上田晩年の革新的な制作を見ていく。

これまで、まとまった数の上田の作品を収蔵し、展覧会の開催と図録を刊行した実績のある自治体及び公共施設として、北海道滝川市の滝川市美術自然史館、兵庫県三木市、新潟県北区の北区郷土博物館（旧新潟市豊栄博物館）が挙げられ、上田関連の収蔵品は関連資料も含めてそれぞれ、約 300 点、約 359 点、221 点となっており、これらの施設で発行された図録には彩書作品も掲載されている。¹⁶ 彩書について先行研究では、図録等の文献と「特別展 没後 50 年上田桑鳩展」（三木市立堀光美術館、2018 年）での作品の実見に基づいた作品分析がなされた。その結果、上田が重視した毛筆の操作が、有彩色の使用によってより鮮明に可視化されていること、運筆の変化、文字の配置の変化に加え、色の変化を多様な印象を作り出す要素として用いていることが明らかになった。また、画家の小林和作との合作《西國寺襖：寒山詩》では、書の主張が強い新たなスタイルの書画への挑戦が指摘され、明治期の「書画分離」を革新的な形で回復していることが読み解かれている。¹⁷ ただ、先行研究では彩書の実見はごく限られた範囲であったため、本研究では、彩書の実見を重視した調査に基づく作品分析を行い、その試みを検討する。

III 上田桑鳩作品の収蔵状況とその経緯

本章では、上田作品の現在の収蔵状況を確認し、上田の受容を検討する。ここでは、Web 上のデータベース検索と人を介した情報に基づき、電子メールと電話による収蔵施設への照会を行った。その結果、東京都美術館、兵庫県立美術館、安芸市立書道美術館、筆の里工房、三木市、宮崎県立美術館での上田作品や関連資料の収蔵が判明した。

3.1 Web データベースによる収蔵の確認と収蔵の経緯

まず、データベースを利用した調査結果から述べる。近年、美術館や博物館での収蔵品のデータベース化と Web を通じたその公開が進みつつある。今回、そのような 39 のデータベースを使用して調査を行った結果、東京都美術館と兵庫県立美術館の 2 館で上田の作品収蔵が確認できた（表 1）。この 2 館での収蔵作品と収蔵の経緯は、次のとおりである。

東京都美術館では、《騰》（制作年不明）が収蔵されている。137x136.1cm という作品サイズと作品画像が掲載されており、ほぼ正方形の白地の画面に、黒で一文字がかすれを伴って書かれていること

16 『桑鳩 UEDA SOKYU1899-1968—上田桑鳩』三木市教育委員会、2014 年。『—現代書道の巨匠—上田桑鳩収蔵作品図版目録』新潟市豊栄美術博物館、2009 年。『生誕 100 年記念書家・上田桑鳩の世界』滝川市美術自然史館、1999 年。『書の新時代を切り拓いた芸術家上田桑鳩展—新潟に伝えた革新の精神—』新潟市北区郷土博物館、2017 年。現在の収蔵品点数については、各施設への照会。

17 向井『戦後前衛書に見る書のモダニズム』。

が分かる。¹⁸ 東京都美術館による書作品の収蔵は、1963 年度から 1978 年度にかけて行われ、1994 年には東京都現代美術館に移管されたが、2011 年 7 月に東京都美術館に再移管された。¹⁹ 現在は 30 名の作家による作品 36 点の収蔵があり、「コレクション展」などで展示されている。²⁰ 制作年が判明しているものは 1950 年代から 1970 年代の 20 点で、制作年が不明のものも古典作品ではなく近代の作家に特化しており、収蔵同時に同時代の作品を選んでいたことが分かる。収蔵の経緯は現時点で明らかでないが、1950 年代の書の海外巡回展が成功した後、1960 年代は前衛書の新たな展開を牽引していた墨人会の森田や井上が、国内外で作品を発表していた時期であった。例えば森田は、フライブルグ書展（1960 年）、モントリオール万国博美術展（1967 年）に出品している。²¹ 東京都美術館の収蔵時期は、この動きと連動しているように見えて興味深い。

表 1：上田桑鳩作品収蔵状況

検索システム名称	URL	収蔵 作品数
東京都美術館収蔵品・アーカイブズ資料検索	http://jmapps.ne.jp/tobikan/index.html	1
独立行政法人国立美術館 所蔵作品総合目録検索システム	https://search.artmuseums.go.jp/	0
札幌芸術の森収蔵品検索	http://jmapps.ne.jp/spgjmr/b/	0
岩手県立美術館収蔵品検索	https://www.ima.or.jp/collection/search-shiryo/	0
秋田県立近代美術館所蔵資料検索	https://da.apl.pref.akita.jp/moma/	0
アーツ前橋収蔵品検索システム	http://jmapps.ne.jp/artsmaebashi/	0
茨城県立近代美術館所蔵品検索システム	http://www.reserch.modernart.museum.ibk.ed.jp/	0
埼玉県立近代美術館収蔵品検索	http://jmapps.ne.jp/momas/index.html	0
東京藝術大学大学美術館収蔵品データベース	http://jmapps.ne.jp/geidai/	0
サントリー美術館コレクションデータベース	https://www.suntory.co.jp/sma/collection/	0
練馬区立美術館収蔵品データベース	http://jmapps.ne.jp/nerima_art/	0
武蔵野美術大学美術館収蔵品検索	https://mauml.musabi.ac.jp/museum/search/	0
東京富士美術館収蔵品検索	https://www.fujibi.or.jp/our-collection/search-of-collected-works/	0
神奈川県立近代美術館収蔵作品検索	http://www.moma.pref.kanagawa.jp/webmuseum/	0

18 東京都美術館 収蔵品・アーカイブズ資料検索 http://jmapps.ne.jp/tobikan/det.html?data_id=40、最終閲覧 2022 年 11 月 25 日。

19 東京都美術館 <https://www.tobikan.jp/archives/collection.html> 最終閲覧 2022 年 11 月 25 日。

20 同上。

21 「森田子龍 日本美術年鑑所載物故者記事」（東京文化財研究所）<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/10563.html> 最終閲覧 2022 年 11 月 25 日。

横浜美術館収蔵品キーワード検索	https://inventory.yokohama.art.museum/	0
山梨県立美術館収蔵品検索	http://jmapps.ne.jp/yamanashimuse/	0
松本市美術館コレクション検索	http://jmapps.ne.jp/matsumoto_artmuse/	0
石川県立美術館所蔵品検索	https://www.ishibi.pref.ishikawa.jp/collection/index.php	0
小松市立本陣記念美術館所蔵品検索	http://jmapps.ne.jp/kmthk/	0
白山ミュージアムポータルサイト収蔵品検索	http://www.hakusan-museum.jp/goods/goods_search.php	0
福井県立美術館所蔵品検索システム	http://artsearch.pref.fukui.jp/	0
愛知美術館コレクション検索	https://jmapps.ne.jp/apmoa/	0
刈谷市美術館収蔵作品データベース	http://jmapps.ne.jp/kariya_art/index.html	0
岐阜県美術館所蔵品検索	https://gifu-art.info/search.php	0
滋賀県立近代美術館収蔵品データベース	http://www.shiga-kinbi.jp/db/?cat=12	0
兵庫県立美術館所蔵作品検索	https://jmapps.ne.jp/hpma/	2
和歌山県立近代美術館所蔵品検索	https://www.momaw.jp/collection/heritage/#	0
岡山県立美術館所蔵作品検索	http://jmapps.ne.jp/okayamakenbi/	0
岡山市立オリエント美術館収蔵品検索	https://jmapps.ne.jp/okyoreb/	0
高松市美術館収蔵品情報システム	https://jmapps.ne.jp/takamatsu_webmuseum/	0
徳島県立近代美術館データベース検索	https://art.bunmori.tokushima.jp/category/0007207.html	0
福岡県立美術館コレクション検索	https://jmapps.ne.jp/fma/	0
福岡アジア美術館全所蔵品検索	https://jmapps.ne.jp/faam/	0
福岡市美術館所蔵品検索	https://www.fukuoka-art-museum.jp/archives/	0
長崎県美術館所蔵品検索	http://www.nagasaki-museum.jp/collection/	0
熊本県立美術館所蔵品検索	http://jmapps.ne.jp/kumabi/	0
宇城市不知火美術館収蔵品データベース	http://jmapps.ne.jp/uki_shiranui/	0
大分県立美術館収蔵品検索	http://opamwww.opam.jp/collection/search/work_info/	0
鹿児島市立美術館収蔵品検索	http://kagoshima.digital-museum.jp/index.php?app=shiryo&mode=search_detail	0

(筆者作成)

兵庫県立美術館では、《啼鳥》(1968 年)と《茶碗・賛》(1968 年)の2点が収蔵され、いずれも紙本墨書、前者が72×140cm、後者が141.2×70.4cmであり、「四尺画仙」や「全紙」とも呼ばれる書道用紙のサイズと概ね一致している。作品画像の掲載はないため、書き振りは確認できない。収蔵の経緯は、1987年に神戸そごうで開催された「現代書道の巨匠 上田桑鳩展」への出品作が、1988年に飛雲会より寄贈されたことによる。同年は、深山龍洞作品4点、宇野雪村作品1点の寄贈があり、地域ゆかりの作家による作として、同館は書作品を相次いで受贈していた。収蔵は、収集会議(当時の審美委員会)を経て決定された。これまで展示される機会は少なかったが、2023年4月29日から7月23日まで、この2点が常設展示室の書の特集展示で出品予定である。²³

今回の調査によって、近年進みつつあるアーカイブの構築とそのWeb公開によって、現時点での各施設での作品収蔵状況が確認できた。ただ、データベースが多岐に渡るため、それらが連携されるとより効率的に活用できよう。また、東京都美術館での収蔵の経緯は現時点で明らかでなかったものの、収蔵時期が戦後に前衛書が隆盛となった頃と重なっている点が興味深く、詳細をたどるための資料保存の重要性があらためて浮き彫りになった。

3.2 人を介した情報による収蔵の判明と収蔵の経緯

次に、人を介して判明した収蔵状況を見ていく。本研究を進める過程で、関係者を通じて、Webからはアクセスできない上田作品の収蔵情報が得られ、安芸市立書道美術館、筆の里工房、宮崎県立美術館での作品収蔵が判明し、三木市での新たな収蔵情報が寄せられた。三木市での収蔵と展覧会調査については、第四章で述べる。

安芸市立書道美術館では、寄贈作品2点、寄託作品2点の上田作品が収蔵されている。²⁴寄託者への聞き取り調査により判明した寄託の経緯は、次の通りである。寄託作品は、1965年頃に石愛好家でもあった上田が弟子の中原一耀と高知県を訪れ、寄託者の父親と一緒に石探しをした縁で、寄託者の実家に滞在したお礼に贈られた作品5点中の2点である。いわゆる趣味人で、石の愛好家として知られていた寄託者の父親が中原と知り合い、上記の縁となった。寄託者の母は、昼は石探し、夜は酒を酌み交わす上田との付き合いの世話のために、忙しくて大変だったと語っていたという。寄託者は特に書に縁はなかったが、上田の作品を面白い書で楽しいと感じ、作品を大切に保管していた。作品寄託は、²⁵寄託者の夫の勤務先の校長が書家で上田を評価しており、その人物を通じて美術館への連絡が行われた。寄贈者は寄託者と異なる2人であり、その1人は上田桑鳩の弟子で、²⁶上田が主宰した書道団体である奎星会の結成にも関わった人物だった。寄贈の経緯は現時点で明らかでないが、同館の開館に尽力した書家の南不乗が作品寄贈を呼び掛け、全国の書家が様々な作品を寄贈した際の一つと考えられている。²⁷いずれも、上田を評価する書家がキーパーソンとなり、収蔵に繋がっている。

22 兵庫県立美術館所蔵作品検索 http://jmapps.ne.jp/hpma/det.html?data_id=20、http://jmapps.ne.jp/hpma/det.html?data_id=21、最終閲覧 2022 年 11 月 24 日。

23 以上の収蔵の経緯は、兵庫県立美術館への照会。2022 年 11 月 25 日電子メールによる回答。

24 安芸市立書道美術館への照会。2020 年 5 月 30 日電子メールによる回答。

25 以上の本段落の記述は寄託者への聞き取り調査に拠る。2021 年 2 月 24 日電話による実施。

26 安芸市立書道美術館への照会。2020 年 6 月 19 日電子メールによる回答。

27 同上。南は、長兄の手島右卿、次兄の高松慕真とともに手島三兄弟と謳われ、現代書の普及に尽力した。『墨美』の座談会にも名が見られる書家である。

筆の里工房は、筆の産地として歴史のある広島県熊野町によって設置された施設である²⁸。上田も熊野町の筆を使用していた。筆の里工房では、もともと上田作品2点、その他資料1点の収蔵があり、その経緯は、上田本人が来町した際の揮毫、教育委員会からの移管であった。これまで、「上田桑鳩書展～『筆の都くまの』との所録～」(平成21年12月9日～平成22年1月24日)や、収蔵作品展等での展示がなされている。それらに加え、令和3年度に作品40点、その他資料6点の寄贈があり、現在、作品42点、その他資料7点となっている²⁹。これらは、上田の活動時のネットワークが端緒となった収蔵と言えよう。

宮崎県立美術館では、上田作品2点が収蔵されている。2021(令和3)年度、上田桑鳩作品1点の購入の際に、同時に1点の寄贈があった³⁰。収蔵作品の《雲》(1960年)と『『恐怖』幽》(1957年)は、白い紙面に一文字が潤滑を伴った筆致で書かれている。これらの作品は、同館の収集方針の一つである「わが国の美術の流れを展望するにふさわしい作家の作品」に沿った作品として、県立美術館美術作品等収集審査委員会の審査を経て収集された。同館は宮崎県出身の前衛画家である瑛九を中心にコレクションがなされ、瑛九を含む前衛作家達が活動した時代に芸術のジャンルを越えて新たに展開した、優れた独特の造形芸術である前衛書の収集を検討した結果、2019(令和元)年度に森田子龍、井上有一の作品を各1点、2021(令和3)年度に上田桑鳩作品2点が収集された³¹。上田作品の収集がなされた2021(令和3)年度の県立美術館美術作品等収集審査委員会は、専門家や学識経験者7名と同館館長で構成され、7名の内訳は、美術分野の特別委員3名、美術専門家3名、教育関係者1名である³²。上田作品は令和4年度に、宮崎県立美術館第1期コレクション展(4/16～7/18)にて、『身体と動き』と題したコーナーにて、新収蔵作品として展示公開された³³。この収集の経緯は、近年の上田の受容として非常に興味深い。まず前衛書が当時の美術の前衛作家と関連して収集されることが画期的であることに加えて、墨人会の二作家だけでなく、上田作品が日本の美術の流れを展望するにふさわしい作家の作品として審査され、収集されているのである。

今回の調査では、Web上のデータベースによる収蔵の確認とともに、人を介してWebからアクセスできない収蔵状況が判明した。筆の里工房と三木市、宮崎県立美術館では、上田作品や関連資料が令和以降に収蔵されており、懸念されていた散逸が、大幅にとは言えないものの回避されていることが分かった。加えて宮崎県立美術館の収蔵にあたっては、日本の美術の流れを展望する中で上田を含む前衛書が審査されており、上田と前衛書の受容の変化が見られる。ただ、このような変化が現在見られるものの、先に述べたように、彩書については特に、現在でも光が当たりにくい状況にある。そこで次章では、彩書作品の実見に基づいた分析を行っていく。

28 筆の里工房 <https://fude.or.jp/jp/kobo/>、2022年12月5日最終閲覧。

29 以上の収蔵点数と経緯は筆の里工房への照会。2022年12月2日電子メールによる回答。

30 『宮崎県立美術館年報令和3年度 ANNUAL REPORT OF MIYAZAKI PREFECTURAL ART MUSEUM 2021 No.26』宮崎県立美術館。

31 以上の収集の経緯は宮崎県立美術館への照会。2022年11月11日電子メールによる回答。

32 『宮崎県立美術館年報令和3年度 ANNUAL REPORT OF MIYAZAKI PREFECTURAL ART MUSEUM 2021 No.26』。

33 宮崎県立美術館への照会。2022年11月11日電子メールによる回答。

IV 上田晩年の彩書の試み

本章では、1956年に日展から脱退して周縁での活動を行なう中でも革新的な制作を続けた上田の有彩色による作品制作に注目して、作品の実見に基づく分析を行い、そこでの試みを論じていく。ここでは、2022（令和4）年度に三木市へ寄贈された上田作品のお披露目となる『開館40周年記念特別企画郷土の書家上田桑鳩展～上田家寄贈作品から～』（三木市立堀光美術館、2022年10月1～30日〈前期〉11月5～27日〈後期〉）での展示作品調査と滝川市自然美術史館での作品調査に基づいて、分析を行う。

4.1 三木市収蔵の彩書

本節では、上述の展覧会で実見した上田の彩書作品の分析を行い、その試みを検討する。三木市は上田の郷里であり、そこでの人のつながりは上田を支えていた。³⁴三木市では、これまで85点の上田関連の収蔵品があったが、令和4年度に約274点の寄贈があり、上田関連の収蔵品は約359点となっている。³⁵今回実見した彩書は9点で、内訳は、額作品6点（内、画家小林和作との合作1点）、屏風1点、折帖2点である。

先行研究での小林との合作《西國寺襖：寒山詩》の分析は図版に基づいていたため、本節ではまず、三木市で実見した小林との合作《野竹分青靄 飛泉挂碧峯》（図1）での革新的な制作を見ていきたい。この作品は、絵の上に文字が書かれている構成で、絵が淡い有彩色で描かれていることに対して、文字は鮮明な赤と青でそれぞれ五文字がくっきりと書かれている。桑鳩という署名も他の文字の赤と同様の色合いで比較的大きく書かれ、一見すると署名というよりも赤で七文字が配置されているように見える。絵の中に使用されている淡い赤と青が、文字の赤と青と呼応しており、文字の主張が強いながらも文字と絵が調和している。さらに文字と絵の筆致も近似しており（図2）、色彩と筆致の双方で、文字と絵の調和が図られていることがわかる。文字の配置はランダムで、まるで蝶が飛ぶ、あるいは、花卉が風に舞うような軽やかさを感じさせ、余白に行を並べて書くような従来の画讃とは、全く異なる文字の配置となっている。先行研究では、小林との合作が、絵よりも文字の印象が強い新たなスタイルの書画への挑戦であり、明治期の「書画分離」を問い直し、革新的な形で回復している作品であることが論じられている。³⁶この作品も、文字の主張が強く、文字を絵の上に重ねる革新的な書画のスタイルでの制作となっている。ただ、この作品の実見からは、文字の印象が強いながらも、文字と絵の調和が図られていることが看取された。

34 「上田桑鳩資料」『桑鳩 UEDA SOKYU1899-1968』、45-69頁。

35 三木市への照会。2022年12月1日電話による回答。

36 向井『戦後前衛書に見る書のモダニズム』。



図1 上田桑鳩・小林和作《野竹分青靄 飛泉挂碧峯》
1965年、44×52cm、三木市教育委員会



図2 図1部分

次に、折帖の《圓空佛》（制作年不明）（図3）を見ていこう。実見できた範囲では、大きめの文字の周りに小さな文字が書かれているページと、写真が貼られてその周囲に文字が書かれているページが交互に配されていた。表紙にはタイトルが中央の上から下に向かって墨で縦書きされ、黄色の地が細長い形状で文字の背景になっている。それらが、細い角先で縁取られた赤色の線で囲まれ、その周りには太めの線が渦巻き状になっている図形と赤の細い線が描かれている。各ページの文字は、大きめの文字が赤か黒で、小さめの文字は赤、青、緑、茶、黒のいずれか一色で書かれて、各ページに印が押されている。表紙、各ページ、それらの並べ方ともデザイン性が高く、写真のページの文字は漢字のみ、大きな文字を取り囲む小さな文字にはひらがなが使用され、異なる印象がつけられている。



図3 上田桑鳩《圓空佛》制作年不明、三木市教育委員会

色を用いて変化を作り出している点は、先行研究で述べられた高野山金剛峯寺の襖への揮毫と同様の手法である。³⁷ そして、円空仏の写真を貼った周囲に文字を書く構成は、上田が楠瓊州の作品を用いて制作した1950年の《桃果紫籠》（図4）を思わせる。この作品では、楠の作品を中央に置き、その周囲に上田が文字を書く制作がなされている。1950年は上田がまだ日展に参加していた時期だが、このような書画を取り入れた手法の意欲的な制作がその時期にもなされていたことを見ると、当時から抱かれている上田の革新性が彩書へと展開していることが分かる。軸の地に文字を書くという点で

37 同上。

は明時代の張瑞図《行書五言律詩》のような識語を軸の地に添えた例が見受けられ、識語が合装されている清時代の金農《墨梅図》のような軸の仕立てもある³⁸。ただ、それらの識語は部分的に文字が添えられる構成であることに対して、上田のこれら二作品では、画面中心に配された書画や写真、大きな文字を、小さな文字でびっしりと取り囲んでいる構成が特徴的である。次章で見る自画讃《今日留守番をする》(1961年)(図5)も同様の配置がなされ、文字の書かれた面積が増した結果、書存在感が大きくなっている。《圓空佛》とこれらを関連させて見ると、上田の制作は書を起点として写真や書画の要素へ手を伸ばし、創作の世界を大きく広げていくものであったことが分かる。それは、書の領域を拡張し、制作の可能性を広げるものであったのだ。



図4 楠瓊州・上田桑鳩《桃果紫籠》1950年、35×44cm、尾道市立美術館

以上ように、三木市収蔵の彩書作品には、文字の主張が強いものの文字と絵の調和が図られている革新的なスタイルの書画や、ジャンルの境界を越え書の領域を拡張する制作が見られた。それでは次に、滝川市自然美術史館での上田関連の収蔵を見ていこう。

4.2 滝川市自然美術史館収蔵の彩書

本節では、滝川市自然美術史館での上田関連の収蔵の経緯を述べるとともに、作品調査に基づいた上田の彩書作品の分析を行い、その試みを検討する。調査は、2022年10月26日から28日まで、北海道滝川市の滝川市自然美術史館に於いて実施した。上田の制作した陶器や風景画も含まれる約300点の収蔵品から、彩書作品を中心に実見を行った。

同館での収蔵の経緯は、滝川市の書家少覚史山と上田の交流に端を発する。少覚は1935年(昭和10年)に滝川中学を卒業後、母校の小学校に代用教員として勤めた。書道の教員を目指していたが戦

38 張瑞図《行書五言律詩》明時代、絹本墨書、兵庫県立美術館。金農《墨梅図》清時代、紙本墨画、兵庫県立美術館。「中国明清の書画篆刻—梅舒適コレクションの精華—」兵庫県立美術館、2023年1月21日～2月19日(第1期)での展示作品を実見。

後はそれを断念し、会社経営の傍らで書道の活動を行った。代用教員時代の教え子との会話が発端となって、1954年（昭和29年）に上田が滝川を訪問し、それから1967年（昭和42年）まで毎年、上田は滝川を訪れ、少覚も上京の折には上田を訪ねた。上田の縁を通じて、多くの書家が滝川を訪れ、1986年（昭和61年）の滝川市美術自然史館の開館時には、上田の流れにある布穀会³⁹の展覧会で展示された上田作品が寄贈され、少覚の所蔵する上田作品も寄贈された。

また滝川で上田は、石を探す活動も行っていた。当時の様子が後年の座談会で、次のように語られている。

少覚（前略）徹底していて、ついていったものは石をかつがせられたりして悲鳴をあげたものですが、とにかく造詣が深かったですね。北海道の古潭石は有名ですが、ここの石はここだけでなくこっちの層にもあるはずだ、といった具合で、どちらが地元の人間だかわからない

山田 私も二度ほど山について行ってひどい目に会いましたが、おかげで石というものはどういうものであるか、石のおもしろみといったものをおぼろげながらわかるようになりましたね（後略）⁴⁰。

先述の高知でも上田が石を探す活動をしていたところを見ると、上田が各地を訪問する目的のひとつに、石との出会いを求めていることが考えられる。陶器や風景画も制作していたように、上田は書だけに留まらない幅広い興味で活動を行い、各地を探訪していたのだ。そのような活動を通じての各地での人との出会いと交流から、こうした収蔵が実現しているのである。

では次に、滝川市美術自然史館の彩書の作品を分析する。今回の調査で実見できた彩書作品は17点あり、一文字だけを書いたものが7点、複数の文字を書いたものが4点、自画賛が1点、画家との合作が5点であった。ここでは、先行研究で検討されていない形式の自画賛と、多文字の作品を見ていこう。

まず、自画賛《今日留守番をする》（図5）から見ていきたい。この作品は、丸い花瓶に生けられた牡丹の絵が墨と有彩色で描かれ、それを取り囲む配置で文字が書かれている。画面右下に丸い花瓶が配置され、そこから上と左上へ向かって牡丹の花と葉が伸びており、文字は余白の右上から始まって右端一行を上から下へと書いた後、上の余白を右から左へと進み、左端で画面の上から下へと一行書かれた後は、下の余白を左から右へと進んでいる。《圓空佛》（図3）では、大きな文字あるいは写真を小さな文字が取り囲んでいたが、ここでは絵を文字で囲む構成となっている。書かれている内容は、花を見舞いにもらって嬉しかったというものである。上田は、昭和初期に書を線芸術と解釈し、「対象物から受けた感懷を表現し得るものではないか」と述べていた⁴¹。この作品は、感懷を受けた対象物をも描き込んだものと言えるだろう。文字だけの使用に留まらない書画へと越境する制作である。文字は大きなデフォルメはなされていないが、整った文字を書く意図は感じられない書き振りで、のび

39 『少覚史山の「書」』私家版、1988年。

40 「飄々と15年 滝川を愛した桑鳩」（座談会出席者：サークル鉄工場代表取締役少覚納、歯科医松川健二、道央建鉄常務山田宇一、なか田社長中田正己）『月刊わが北海道』（1972年12月）、17頁。

41 奎星会編『上田桑鳩—書・現代への提言』毎日新聞社、1999年、27頁。（初出：「書道写生説（二）」『書道藝術』昭和12年8月。）

やかである。文字は墨で書かれているものの、その所々に有彩色が見える。例えば、画面右上の「出て」や画面上部の「いると」の「い」が黄色味を帯びており、その色合いは画面左に描かれた牡丹の花の部分に見える黄色と似ている。さらに、画面左下の「見舞いくれる」の「見舞い」のところどころに牡丹の花と同じような赤色が見える（図6）。筆の動きに沿って有彩色が現れているため、筆の一部に有彩色を含ませて書いたと考えられる。1964年の彩書の制作で上田は複数の有彩色を筆に含ませたことを述べているが、ここでは墨と有彩色が筆に含められて書かれているのである。⁴² 墨で描かれている花瓶の中央あたりにも牡丹の花と同様の赤色がうっすらと見えており、牡丹の花や葉は、墨による輪郭線と有彩色とで描かれているため、色の取り合わせが同様である文字と絵がなじむように調和して見える。先行研究では、複数の有彩色を筆に含ませる技法で運筆の視認性が増していることが指摘されたが、⁴³ ここでは同様の技法が墨と有彩色を用いて使用され、画と賛が呼応するような効果を生んでいる。



図5 《今日留守番をする》1961年、
44 × 35cm、滝川市美術自然史館

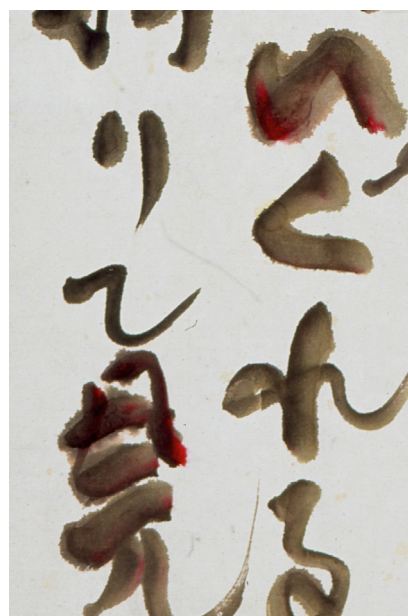


図6 図5部分

次に、多文字の作品の《樂 樂其生保其壽》（1965年頃）（図7）を見てみよう。画面中央に、黄色の染料系と赤の顔料系が混じったように見える有彩色で「樂」という文字が大きく書かれ、画面下部に右から左へ、その文字の下部を挟む配置で、六文字が青色で書かれている。大きく書かれた一文字と小さめの多文字は、色と大きさで区別されており、《圓空佛》で使用されていた、朱書きの大きな文字と有彩色の小さな文字の組み合わせがここでも見られる。大きく配置された一文字は、《圓空佛》での写真や中心に置かれた文字、《今日留守番をする》での絵のように目を引く広い面積での配置となっているが、小さめの多文字が余白がつけられる形で添えられている構成がそれら二作とは異なっており、余白を要素とした彩書作品と言える。

42 奎星会編『上田桑鳩』、341頁。（初出：「金剛峯寺別殿襖書き報告」『奎星』昭和40年2月。）

43 向井『戦後前衛書に見る書のモダニズム』。



図7 《楽 樂其生保其壽》1965年頃、37.5 × 48.2cm、滝川市美術自然史館

そして、《慈光》(1965年)(図8)では、赤と黄が混ざった有彩色で「慈光」という文字がデフォルメされて大きく書かれ、その右端と左端に墨で書かれた小さめの多文字が配置されている。その内容は「昭和四十年秋日 於布穀庵撫石尊者桑鳩」であり、落款、いわゆる署名であるが、それが大きな文字に沿って、空間を埋めるように配置されている。画面左下の「布」と有彩色の「光」が重なっている部分を見ると、赤い粒子が「布」の画に沿って流れているため、「布」が後から書かれたことが分かる(図9)。そして、「布」の最終画に赤い色が混じっている。これは、あらかじめ筆に色を含ませたのではなく、「光」の上から「布」の画が重なったことで、墨を含ませた筆に「光」の赤い顔料が混ざったためと見られる。また、この作品をモノクロに置き換えて見ると(図10)、デフォルメされた「慈光」が岩や滝を描いた一部分のようでもあり、一見、抽象画のようにも見える。上田はこの「慈光」という文字を、絵のように捉えているようにも見受けられる。



図8 上田桑鳩《慈光》1965年、
47.5 × 57.0cm、滝川市美術自然史館



図9 図8部分



図10 図8のモノクロ

これら三点に共通して見られるのは、分類の境界を物ともしない姿勢である。《今日留守番をする》では絵と文字を呼応させ、《楽 楽其生保其壽》では《圓空佛》で使用されたようなデザイン的な配色の手法が見られ、《慈光》では文字を絵のように捉えた可能性も見受けられる。本節で検討した文字のみを使用した上田の彩書にも、ジャンルを越える創作手法との関連が見て取れるのである。

そして、上田を慕い、支えた人のネットワークが滝川でも見られ、それがこのような革新的な作品を含む上田関連の収蔵につながっていることが明らかになった。平面の書作品の他に、上田の制作した陶器や風景画も収蔵されているところを見ると、上田の幅広い興味と制作意欲が滝川の支援者に受容されていたことが分かる。座談会で語られている言葉をたどると、上田はのびのびと活動したようである。上田の多様な興味と、ジャンルを越えるおおらかで革新的な制作は、周縁で支えられていたのであった。

V おわりに

本稿では、上田作品の収蔵状況を調査し、三木市立堀光美術館と滝川市美術自然史館で彩書を中心とした作品調査を行った。収蔵調査では、ウェブ上のデータベースでの収蔵確認に加えて、人を介した情報によって、そこでは得られない収蔵状況が判明した。令和以降の収蔵が複数あったことも分かり、懸念されていた散逸が大幅にはと言えないものの回避されている。研究の進展や一般からの情報アクセスの意義を考えると、それらも網羅されるような情報の一元化と公開及びその更新が望ましい。しかし諸般の事情を鑑みるとその早急な実現は難しいと考えられるため、本稿はそれを補完する一端となろう。地方での収蔵の経緯は、先行研究でも指摘された上田の活動当時の人の縁が契機となるものが主であったが、それに加え、宮崎県立美術館では令和以降に、日本の美術の流れを展望する中で、上田を含む前衛書が評価されて収集の判断がなされていたことが分かった。これは、これまで墨人会の森田と井上を中心に戦後の前衛書が注目されることが多かったことに対して、その源流である上田に目を向け、日本の美術の流れとして前衛書を評価した画期的な判断である。

彩書の作品分析からは、ジャンルを越えるおおらかな創作姿勢と手法が明らかになった。三木市で開催された展覧会での作品調査では、画家の小林和作との合作《野竹分青靄 飛泉挂碧峯》で、文字の印象の強い新たなスタイルの書画でありながら、文字と絵の調和も図られていることが看取され、折帖の《圓空佛》は写真も取り入れられてデザイン性が高く、上田の制作が書を起点として創作の世界を大きく広げていくものであったことが分かった。滝川市美術自然史館で実見した自画賛《今日留守番をする》には、同系統の色を用いて文字と絵を呼応させるような技法が用いられており、小林との合作に限らず、文字と絵の調和を図る手法が試みられていることが判明した。多文字の作品の《楽 楽其生保其壽》では《圓空佛》と同様の配色の、異なる大小の文字の構成が見られ、《慈光》では、文字を絵のようにも捉えた可能性が見受けられた。

さらに今回の調査では、滝川で書だけでなく石の愛好も共にした交流があったことが判明した。安芸市書道美術館への上田作品の寄託も石探しの縁に端を発するものであり、上田の書にとどまらない幅広い興味をも含めた活動が、地方で繰り広げられていたことが分かる。上田のジャンルを越える革新的な制作と多様な活動は、中央の書壇や美術制度では疎外されたが、それらは地方で支えられてのびやかに展開された。欧米の美術の影響を受けた日本近代の美術制度から遠い場所で、上田の書の革新性とジャンルの越境、創作の多様性は受容され、現在に伝えられているのである。

図版出典

図 1、図 3 筆者撮影

図 4 尾道市立美術館提供

図 5、6、7、8、9 滝川市美術自然史館提供

図 2、10 筆者作成

参考文献

公刊資料

Akiko Mukai, “Coming Closer and Coming Apart: Avant-garde Calligraphy and Abstract Painting in Postwar Japan-Through the Analysis of Morita Shiryū’s Theory and Practice,” Jeong-hee Lee-Kalisch, Annegret Bergmann (ed.) *Transcultural Intertwinements in East Asian Art and Culture, 1920s-1950s*, VDG als Imprint von arts+science Weimar GmbH, Kromsdorf/ Weimar, 2018, pp.127-147.

Bert Winther-Tamaki, *Art in the encounter of nations: Japanese and American Artists in the Early Postwar Years*, Honolulu : University of Hawai’i Press, 2001.

Cecil H. Uyehara, *Japanese Calligraphy: a Bibliographic Study*, Lanham, Md. : University Press of America, 1991.

Eugenia Bogdanova-kummer, *Bokujinkai: Japanese Calligraphy and the Postwar Avant-Garde (Japanese Visual Culture, 19)*, Brill Academic Pub, 2020.

天野一夫「『書と絵画との熱き時代』展・序説」展覧会図録『書と絵画の熱き時代・1945～1969』財団法人品川文化振興事業団 O 美術館、1992 年、6-14 頁。

天野一夫監修『復刻版「書之美」』（上、下、別冊解説）国書刊行会、2013 年。

稲田宗哉責任編集『森田子龍全作品集 1952-1998』蒼龍社、2019 年。

尾崎信一郎「森田子龍と『墨美』—書と抽象絵画をめぐる—」展覧会図録『森田子龍と「墨美」』兵庫県立美術館、1992 年、13-18 頁。

尾崎信一郎『戦後日本の抽象彫刻—具体・前衛書・アンフォルメル』思文閣出版、2022 年。

笠嶋忠幸『日本美術における「書」の造形史』笠間書院、2013 年。

北澤憲昭『境界の美術史—「美術」形成史ノート』ブリュッケ、2000 年。

北澤憲昭『眼の神殿—「美術」受容史ノート [定本]』ブリュッケ、2010 年（初版 美術出版社、1989 年）。

栗本高行『墨痕—書芸術におけるモダニズムの胎動』森話社、2016 年。

奎星会編『上田桑鳩—書・現代への提言』毎日新聞社、1999 年。

佐藤道信『明治国家と近代美術』吉川弘文館、1999 年。

向井晃子「『書のモダニズム』の萌芽—上田桑鳩に見る前衛書—」『国際文化学』27、2014 年、115-138 頁。

向井晃子『戦後前衛書に見る書のモダニズム—「日本近代美術」を周縁から問い直す』三元社、2022 年。

「飄々と 15 年 滝川を愛した桑鳩」（座談会出席者：サークル鉄工場代表取締役少覚納、歯科医松川健二、道央建鉄常務山田宇一、なか田社長中田正己）『月刊わが北海道』（1972 年 12 月）、14-21 頁。

『—現代書道の巨匠—上田桑鳩収蔵作品図版目録』新潟市豊栄美術博物館、2009 年。

『少覚史山の「書」』私家版、1988 年。

『書の新時代を切り拓いた芸術家上田桑鳩展—新潟に伝えた革新の精神—』新潟市北区郷土博物館、2017 年。

『生誕 100 年記念書家・上田桑鳩の世界』滝川市美術自然史館、1999 年。

『桑鳩 UEDA SOKYU1899-1968—上田桑鳩』三木市教育委員会、2014 年。

『宮崎県立美術館年報平成 31（令和元）年度 ANNUAL REPORT OF MIYAZAKI PREFECTURAL ART MUSEUM 2019 No.24』宮崎県立美術館

『宮崎県立美術館年報令和 3 年度 ANNUAL REPORT OF MIYAZAKI PREFECTURAL ART MUSEUM 2021 No.26』宮崎県立美術館

Web 資料

M+Matters <https://www.mplus.org.hk/en/events/m-matters/>、最終閲覧 2022 年 11 月 25 日。

Symposium: “Writing and Picturing in Post-1945 Asian Art”, Joseph Regenstein Library & Logan Center for the Arts at the University of Chicago, April21-23, 2017,

<https://lucian.uchicago.edu/blogs/writing-and-picturing/>、最終閲覧 2022 年 11 月 25 日。

東京都美術館収蔵品・アーカイブズ資料検索

http://jmapps.ne.jp/tobikan/det.html?data_id=40、最終閲覧 2022 年 11 月 25 日。

東京都美術館

<https://www.tobikan.jp/archives/collection.html> 最終閲覧 2022 年 11 月 25 日。

兵庫県立美術館所蔵作品検索

http://jmapps.ne.jp/hpma/det.html?data_id=20

http://jmapps.ne.jp/hpma/det.html?data_id=21、最終閲覧 2022 年 11 月 24 日。

筆の里工房 <https://fude.or.jp/jp/kobo/>、2022 年 12 月 5 日最終閲覧。

「森田子龍 日本美術年鑑所載物故者記事」（東京文化財研究所）

<https://www.tobunken.go.jp/materials/bukko/10563.html> 最終閲覧 2022 年 11 月 25 日。

〔附記〕本稿の調査にあたり、上田啓之氏、唐岩淳子氏、安芸市立書道美術館、尾道市立美術館、滝川市美術自然史館、東京都美術館、永井画廊、新潟市北区郷土博物館、兵庫県立美術館、筆の里工房、三木市教育委員会、宮崎県立美術館にご芳情賜りました。また、作品画像掲載に際して、ご所蔵先各位、著作権者様にご高配賜りました。末筆ながらここに記し、厚くお礼申し上げます。本研究は、JSPS 科研費 JP19K23010 の助成を受けたものです。